

目次	
史料ネット改組のお知らせ……………	1
史料ネット活動実績・財政報告……………	2
震災から1年半、被災地では今……………	4
新聞記事から……………	6
日本史研究会大会に向けて……………	7
市民講座のご案内等……………	7
シンポ記録集第2集のご案内……………	8
NEWS LETTER 有料購読化のお知らせ……………	8

## 史料ネット改組—歴史資料ネットワークへ!!

歴史資料保全情報ネットワークの活動を支え、見守り、ご協力をいただいた皆さん!!

史料ネットは、1995年2月の旗揚げ以来、被災地の歴史と文化を守り、復興を助けるための活動を続けてきました。先に“NEWS LETTER”第4号をお届けして以降も、被災史料・文化財の救出保全や、市民講座・シンポジウムなどの企画に取り組んできています。さらには、震災に関する資料の収集保存と記録編さん、石造文化財の調査と保全、埋蔵文化財問題などの各種プロジェクトや、被災地各地で市民とともに地域の歴史や史料を掘り起こす活動が進んでいます。

このような状況のなか、震災への緊急対応を目的に発足した歴史資料保全情報ネットワークは、一応この3月末をもって活動を終息しました。しかしながら、上記のように多くの課題が引き続き進行中の現状にかんがみ、史料ネットの母体である阪神大震災対策歴史学会連絡会は年内一杯組織を維持することとし、さらに史料ネットの活動を引き継ぐ新たなボランティア組織として、歴史資料ネットワーク(略称は同じく史料ネット)を4月からスタートさせました。

この新たな史料ネットは、次のような課題に取り組んでいく予定です。

### — 歴史資料ネットワークの取り組む課題 —

- ①震災処理の継続 わずかとは言え今なお続く史料救出を継続し、また自治体が救出史料全部をケアできない現状を踏まえ、整理・保全にあたります。さらに、震災資料収集・記録編さん、石造文化財調査・保全、埋蔵文化財問題などに引き続き取り組みます。
- ②被災地の歴史・文化を守る 市民講座を継続し、さらに被災地に芽ばえた地域と歴史学を結ぶネットワークを育て、歴史を掘り起こし復興に活かす活動を継続します。
- ③普遍的課題に向けて ネットの経験を今後活かせるよう総括し、まとめていきます。さらに、活動を通じて明らかになった、歴史学と社会をめぐるより普遍的な課題に取り組み、その経験を全国に発信し、ネットワークの被災地からの拡大発展をめざします。

## 財政確立が急務—ぜひとも再度の支援を!!

被災地の歴史・文化を守り、芽ばえたネットワークを育てていくためには、ネットが現事務局体制を維持し、活動を継続することがぜひとも必要です。1996年度の活動経費は、360万円となる見込みです。助成等の財源確保に努めていますが、現在確保しているのは190万円にとどまっております。基金と記録集販売によって残り170万円を確保する必要があります(内訳詳細は3頁参照)。

歴史学が地域復興に向けて貢献していくことは、被災地住民からも強く求められています。これにこたえるネットの取り組みとその成果は、日本の歴史学や史料保存の事業を大きく発展させていく契機となる可能性があり、ぜひともそれを実現していきたいと、私たちは考えています。

全国の歴史関係者や歴史ファンの皆さんには、これまでも物心両面のご支援をいただいておりますが、これらの趣旨をご理解いただき、再度のご支援をぜひともお願いする次第です。

**史料ネット活動支援基金** (郵便振替)  
 名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 □座番号 01090-7-23009



■被災史料調査・救出・整理・保全活動

パトロール調査は終了 1995年3月の伊丹を皮切りに、神戸・宝塚・明石・川西と5市域にわたって続けられ、多くの未発見史料を発掘するきっかけとなった被災史料パトロール調査も同年11月上旬には一応終了、その後はパトロールによって所在があきらかとなった史料のフォローや、救出された史料の仮整理・保全作業に重点を移して、活動を続けています。

なお続く救出行動 とは言え、救出行動が完全に終了したわけではありません。被災地では、ようやく母屋を建て直し、封印していた蔵の手当てにこれからかかるといった旧家など、なお家屋の解体や修理が続いています。件数的には少なくなったとは言え、それにとまなう史料救出や保全作業も続いており、年が明けたこの2月から4月にかけても、神戸および宝塚で計3件の救出行動を実施しました。

史料の整理・保全の行方は？ 救出された史料の整理・保全については、基本的に現地の自治体等公的機関の責任において実施されるべきものと、史料ネットでは考えています。しかしながら現実には、すべての被災史料を自治体が保管し、整理を実施する状況にはありません。史料ネットとしては、これらの史料をケアし得る公的機関の体制整備を要望しつつ、自治体がケアしきれない史料については、地元住民とも協力しながら仮整理・保全作業を進めています。

なかでも、保管上も整理作業上もネックとなっているのが、各地で大量に救出された襖・衝立等の裏貼り文書です。解体し、丹念にはがして保存する必要がありますが、それには大量の人手と時間を要します。これについては、文化財等救援委員会がレスキューした明石の史料にも大量の襖が含まれており、史料ネット救出分とあわせて、全国的な支援協力体制による解体・整理プロジェクトも検討する必要があります。

史料ネットの活動実績 1996年3月末の歴史資料保全情報ネットワーク終息の時点での活動実績は、下表のとおりとなっています。これらの活動の結果、放置すれば瓦礫や家財とともに廃棄されたかもしれない数千箱にもおよぶ古文書・書籍・民具などの歴史資料・文化財が救出・保全され、被災地のかけがえのない歴史遺産を守り後世に伝えていくことができました。

(なお実績の詳細は、本ニュース末尾で紹介している『シンポ記録集』第2集をご覧ください)

活動の種類	件数等	参加延人員（連携団体等含む）
史料救出行動	34件	472人（うち史料ネット304人）
パトロール調査	5市域37回	326人（自治体職員若干名を含む）
史料整理作業	10件45日間	226人（全史料協有志および自治体職員等を含む）

活動の投げかけた課題 日本の歴史学会にとってはじめての、大規模災害に対する組織的な史料救出・保全活動の経験は、私たちに対して、さまざまな課題を投げかけています。

今回の史料ネットの活動を総括し、あきらかとなった課題を分析し経験を共有化していく作業は、今後歴史学会連絡会によって組織的に進められていく予定です。その最初のころみとして、昨年12月17日（日）には史料ネット主催の「ボランティア交流集会」が開催され、活動への参加者33名による感想・意見交換がなされました。そこで参加者から口々に出されたのは、プラス面としては今回の活動を通じて、文書所蔵者をはじめ地域住民と直接話せたことなど、普段の研究の場では経験できない貴重な体験をすることができたということでした。その一方で、市民と研究者との間の「歴史認識のギャップ」、すなわち、一般に市民の間では古文書や民具といった身近な歴史資料が必ずしも守るべき文化遺産と認識されておらず、それに対して研究者の側も説得的に語る言葉を十分には持ち得ていないという点が、共通して指摘されました。

## ■市民講座・シンポジウム

前記のような課題を解決し、歴史研究者が市民とともに歴史を学び考えることを通して、被災地の歴史・文化を復興していくことを目的として、史料ネットでは「歴史と文化をいかに街づくりシンポジウム」および「震災復興 歴史と文化を考える市民講座」を開催しています。“News Letter” 第4号以降の開催状況は次のとおりです（いずれも地元自治体が共催または後援）。

日時・場所・参加者等	講演者・コメンテーターおよび内容
1995年12月3日(日) 第2回市民講座 70名 芦屋市立美術博物館	長山泰孝(帝塚山大学教授)「古代国家と震災」 古川久雄(六甲山麓遺跡調査会)「震災復興と埋蔵文化財」 西谷地晴美(神戸大学講師)「気候変動と中世史」
1996年1月28日(日) 第2回シンポ 130名 神戸市立博物館	足立裕司(神戸大学助教授)「歴史的建造物の総合的な保全にむけて」 和田晴吾(埋文関係救援連絡会議)「被災地域の埋蔵文化財と今後の課題」 坂本勇(震災記録情報センター)「震災記録と専門家の役割」 藤田明良(史料ネット)「歴史資料救済活動と地域づくり」 内田俊秀(京都造形芸術大学助教授)「イタリアの都市復興と文化遺産」
1996年3月24日(日) 第3回市民講座 90名 西宮市立郷土資料館	今井修平(神戸女子大学教授)「近世都市の行政と自治」 奥村弘(神戸大学助教授)「被災史料が語る地域の近代」 大崎正雄(西宮市教育文化センター)「古文書の現状と課題-西宮市の場合-」
1996年5月19日(日) 第4回市民講座 宝塚東公民館 110名	大国正美(神戸深江生活文化史料館副館長)「近世の摂津と宝塚地域」 津金澤聡廣(関西学院大学教授)「阪急電鉄による沿線開発と「宝塚文化」」 河内厚郎(評論家・プロデューサー)「摂津阪神学から見た宝塚の芸能文化」 鄭鴻永(兵庫朝鮮関係研究会)「宝塚に埋もれた朝鮮人の足跡を訪ねて」

毎回好評、歴史学は期待されている!! これらの企画は内容的にも好評で、毎回成功をおさめています。参加者からも「古文書等から歴史的背景をどのように展開し、読みとっていくのかの大切さを知ることが出来ました。また、行政の取り組みに不十分な面があるとの意見に問題点を感じました。文化財に対し、専門家の先生をはじめ、我々市民としても問題意識をもって取り組むべきだと思いました(第3回西宮講座)」「過去の歴史を深く学び、反省の上に立って未来を考えていかねばならない。そういう意味で、今日の講座は、身近な問題を分かり易く取り上げてもらい、大変良かったと思う(第4回宝塚講座)」といった積極的な感想が多数寄せられています。

こういった声から、歴史学に市民が寄せる期待が決して小さくないことがわかります。史料ネットでは、ここにこそ「歴史認識のギャップ」を埋める鍵があると考えています。そこで、これらの企画を継続し、さらに地域密着型の各種プロジェクト(4頁参照)を進めていきます。

## ■財政報告

全国からのご支援により歴史資料保全情報ネットワークは1996年3月末まで1年2か月におよぶ活動を続けることができました。募金総額は654万9,876円でした。収支決算は次のとおりです

決算(95.2~96.3)	内 容 内 訳
歳入 9,707,574円	募金6,549,876円 記録集販売1,003,398円 講座資料代等2,154,300円
歳出 9,728,194円	通信費857,826円 備品・消耗品778,288円 *ランティ保険543,671円 パトロー・レスキュー経費2,060,389円 常駐員経費3,239,331円 会場費501,729円 報告書等印刷費1,617,580円 その他経費129,380円

1996年度の歴史資料ネットワークの予算見通しは、下表のとおりです。活動資金確保のためには、募金および記録集販売による再度のご支援が必要です。ぜひご協力をお願いします。

1996年度予算	内 容 内 訳
歳入 3,600千円	募金1,400千円 助成等1,800千円 記録集販売400千円(⑤500×800冊、うち6月末現在約200冊・100千円販売済)
歳出 3,600千円	月額300千円×12月(常駐員・*ランティ経費250千円、備品・消耗品・通信費等50千円)

## 震災から1年半、被災地では今…

### 《街の石造文化財》

倒壊した石造物（石塔・石碑・鳥居・灯籠・玉垣等）の内、文化財指定を受けていたものは県や市によって復旧されたが、街中や神社の境内などにあった莫大な石造物のほとんどは放置されていた。史料ネットでは保存科学の専門家グループと連携し、今年三月より被災石造物の現状調査を神戸などで実施している。その結果、修復・復元されたもの（予定も含む）は全体の三割程度で、約四割が既に撤去・破棄済み、三割が処置未定（境内の隅に野積み状態など）という概況がわかった。また調査中に旧兵庫津和田神社の倒壊した大灯籠が、尾張の内海廻船中と深川や浦賀など江戸湾周辺の間屋たちの奉納であることが銘文から判明。幕末流通史の貴重な史料として神主に保全を要請した。街の石造物のほとんどは近世以降のものだが、いままで銘文の記録など本格的な調査がされていないものが多く、このままでは貴重な地域の記憶が消失してしまうおそれがある。史料ネットでは関係者に修復・保存を呼びかけるとともに、銘文などの記録調査を計画している。これには測量機器メーカーから、新開発のハイテクカメラ提供の申し出があり、機能試験をかねた公開調査を4月17日におこなった（新聞記事参照）。

### 《復興工事と埋蔵文化財》

復興工事にとまなう事前調査は、全国からの派遣調査員の応援をうけて精力的に実施され、その量は去年一年間だけでも200箇所前後、通常の七～八年に相当すると言われる。しかし、①発掘結果の公開現地説明会がほとんど開かれぬ、②環境整備事業や施工者との保存協議など現状保存のための措置がとれない、③調査報告書の作成を保障するような体制が組んでいないなど、深刻な問題点も浮かび上がってきた。このままでは震災復興にとまなう発掘調査の成果は、速報などで一部が知らされるだけで、データの大部分が研究者や市民に公開されない恐れがある。現場周辺住民向けの非公開説明会では「地元こんな遺跡があったのを知ると励みになる」との声が住民からも出ている。史料ネットでは、成果の公開と重要遺跡の保存に向け市民・行政への働きかけを強めるため、現在、関係団体との協議を進めている。

### 《尼崎聞き取り・現代史プロジェクト》

尼崎では、市による新市史編さん事業や、戦後史掘り起こしに取り組む市民グループなどとも連携しながら、聞き取りやフィールドワークなどを中心とした地域史プロジェクトがはじまっている。すで、戦後闇市のフィールドワークや聞き取り、労働運動や公害関係資料の調査に着手したほか、大字・農業史調査プロジェクトも進行中である。さらに、これらの取り組みのなかで、尼崎および阪神地域の各種公害反対運動・裁判資料の保存問題が浮かび上がってきた。西淀川公害、43号線、尼崎大気汚染といった阪神地域の一連の公害裁判は、この間いづれも住民側の勝訴もしくは有利な方向で決着の見通しである。すでに西淀川では公害地域再生センター（仮称）設立準備会がつくられ、新たなまちづくり

の取り組みがはじまりつつある。これらの裁判および公害反対運動のなかでは、膨大な資料が蓄積されており、これらの資料の組織的・系統的な保存・活用が、今後の課題となってきた。すでに一部の団体からは、史料保存機関や歴史研究者の協力を希望する意思が示されており、ネットとしても今後積極的に取り組んでいく必要がある。

#### 《震災資料収集と記録編さん》

震災に関する資料の収集・保存と記録の編さんについては、すでに兵庫県が(財)21世紀ひょうご創造協会に委託して10年計画のプランに着手したほか、西宮市・尼崎市などいくつかの自治体で取り組みが始まっている。さらに、公共図書館での震災文庫設置・資料収集が進められているほか、図書館・史料保存機関職員有志による「震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク」や、NGO文化情報部から発展改組した震災記録情報センターなどの取り組みがある。史料ネットは、これら官民双方の取り組みと連携しながら、この課題にあたっている。特に、21世紀ひょうご創造協会に対しては、桃山学院大学教授の芝村篤樹氏がアドバイザーとして協力するなど、継続的な連携・協力関係を保っている。こういった動きのなかで、1996年1月17日、尼崎市総合文化センターにおいて、史料ネット主催の「震災記録の保存を考える研究会」を開催した。参加者は22名であった。さらに2月23日には、21世紀ひょうご創造協会との共催、全史料協の後援により、「震災記録の保存と編さんに関する研究会」を開催、各自治体の担当部局や、歴史研究者・史料保存関係者など約60名の参加を得た。ここでは、兵庫県と西宮市の取り組みが紹介されたほか、芝村氏と全史料協会員である大西愛氏により、歴史学・史料保存サイドからの問題提起がなされた。史料ネットとしては、今後も兵庫県はじめ各自治体との協力関係を追求していくほか、歴史学以外の分野とも連携した学際的な調査研究や、世論喚起などにも取り組んでいく予定である。

#### 《市民と連携した救出史料の活用・展示》

復興の中で地域の歴史や史料に対する市民の関心が高まっている。宝塚では5月から、巡回調査で発見した近世文書をテキストに、市民といっしょに地域の歴史を掘り起こす企画「宝塚の古文書を読む会」(市史資料室と共催)が始まった。予想をはるかに上回る大勢の市民が詰めかけ(第1回=約120名、第2回=80名、第3回=90名)、関係者を驚かせている。ネットのメンバーの大学院生を講師にすすめられているが、参加者からは「地元こんな史料があるとはビックリした」「単なる古文書の読み方だけでなく歴史的背景がわかるのがうれしい」などの声が寄せられている。4回目以降は、市民主体の研究会として自主的運営に切り替えるが、すでに70名以上の参加申し込みがきている。

また西宮門戸地区では震災後、多くの史料が発見されたのを機に、地元住民や救出に参加したネットのボランティアを中心に、門戸の歴史資料を守る会が結成された。地元資料館をつくる話も出ているが、当面は7月に開催する「門戸の歴史を知ろう展」に向けて史料の整理や準備が進められている。

被災の文化遺産など  
街づくりを生かそう  
中央区で震災シンポ  
阪神大震災で被災した文化遺産や歴史資料の現状を探り、住民の心の拠り所となる街づくりを生かす視点を以て、「第二回震災復興・歴史と文化をいかに街づくりシンポジウム」(歴史資料保全情報ネットワークなど主催、毎日新聞神戸支局など後援)が二十八日、中央区の神戸市立博物館階階講堂で行われ、約二百人が参加した。



1996年3月11日(月)  
産経新聞

兵庫県尼崎市にある市立地域研究史料館で、「阪神・淡路大震災から一年をふりかえる」被災史料救出活動を通して「一」という展示が開かれていた。震災の被害を受けた市内の旧家などから、同館職員やボランティアの手で助け出された古文書や歴史資料が、ケースの中に並べられている。

こうした被災地での古文書の救出活動については、震災後に設立された「歴史資料保全情報ネットワーク」(略称「史料ネット」)が、活動報告書の中でまとめている。史料ネットは昨年三月から被災地を回るパトロール活動を行い、大きな成果をあげてきた。

最新の報告書(二月二十九日作成)によれば、その活動は、神戸、西宮、声屋、伊丹、宝塚、明石、池田の各市にまたがり、合計三十五件にのぞいた史料は、みかん箱で約千箱に達するという。また、尼崎市については、市立地域研究史料館が昨年中に十六件の救出を行い、今年に入ってから五件が加わった。

「現在でもレスキューは続いています。古文書の救出は、地道に掘り起こさないう限り出てこない。昨年の四月くらいで一応、救済のメドがたつたとされたこともあったのですが、その後も続々とあつて、今年になってからの依頼も少なくありません」と、同史料館の辻川教係長はいう。

その一例を紹介しよう。一部資料が現在、同史料館で展示されている尼崎市の「太田善夫氏文書」のケース。

太田家は、江戸時代には市内の旧善法寺村の庄屋をつとめ、祖父の昭氏は旧小田村の村長をつとめたこともある。しかし、古文書については、明治のころに同家が火事に遭い、失われたとされていた。

だが、一方では、芦屋市のある旧家からは、熊野水軍に関する貴重な中世文書が姿を消した。昨年四月、解体に合わせた、史料ネットのレスキュー隊が訪れたところ、近世のもの発見したが、がれきの中から目指す中世文書は発見できなかった。何者かが持ち去ったのかもしれない。

救出活動にはボランティアたちの力も大きかった。彼らの力がレスキューの原動力になったケースも少なくない。また、いざというとき、真っ先に街に飛び出していろいろのは、民間の研究者でもある。

辻川さんは、「象牙の塔にこもりがちだった研究者たちが、街に出たていくようになったことは最大の収穫だ」と思いこむ。研究者と地域住民、そして民間の郷土史家の間で、ふたんから交流をもちたいければ、緊急事態にも素早い対応は欠かせない。

### 被災文化財の調査・保存でも注目

灯ろうや鳥居などの石造文化財に刻まれた金石文を、特殊なソフトを組み込んだハイテクカメラによって拓本を取る実験が十七日、神戸市兵庫区和田宮通三の和神神社(梁田伴天宮司)で行われた。これまで専門家で一面に二、三時間かかっていた作業が、慣れれば初心者でも数分で取れることが分かった。阪神大震災の被災地では、倒壊し緊急に調査が必要な石造物が相当数あることが、新技術が注目される。



ハイテクカメラは、測量会社アジテック(本社、東京)が半年前に開発したソフトを、米国のカメラ会社に特注して組み込んだデジタルカメラ。主に城郭などを空から写し、正確な図面を作るのに使われてきた。

被災地で石造物を調査中、このカメラの存在をたまたま知った内田俊秀(京都造形芸術大助教授)が、拓本取りへの応用を同社に持ちかけたところ、可能なことが分かった。

実験では、同カメラで同神社鳥居の面横にある石灯ろうに刻まれた文字を撮影。データを特殊なソフトで解析し、パソコンに映して画像を調整した上、プリンターで印字した。

## 拓本取り スピードアップ化

最初は、ほとんど解読不能だったが、文字部分を拡大したり、モノクロとカラーを切り替えるなどの工夫をするうち、徐々に専門家が取った拓本に近づき、何とか実用のめどが立った。現在、被災地では、内田さんや神戸史学会員の手で、石造文化財の調査が進んでいるが、指定文化財級だけでも数百件が何らかの被害を受けた。中には解体され、がれきとして処分されたものも少なくないという。

このため、金石文の解読と保存に欠かせない拓本取りが急がれていた。被災した古文書の救出・保存などに活躍した歴史資料ネットワークの藤田明良事務局長は「近世以降の石灯ろうなどは、少し前まであまり注目されなかったが、地域の歴史が刻まれた貴重な資料。こうした石造文化財の拓本がストーリーに取れることが、町の復興にも役立つ」と期待を込めている。

◆ ◇ 日本史研究会大会特設部会「阪神・淡路大震災と歴史学—被災資料保全活動から  
見えたこと」(仮題)についてのお知らせ

日本史研究会主催、連絡会参加のもと、本年度の日本史研究会大会で、史料ネットの活動から見えてきた現代日本の歴史認識のあり方と、そこから生まれる歴史学の課題を問う企画を、特設部会として持つことになりました。

史料ネットの活動は、一般の文化財保存の運動が具体的な対象をもっているのに対して、被災地には多様な歴史的文化財があり、全体としてこれを保存していく必要があるという観点から行われました。したがって、活動に参加した歴史研究者は、何よりも市民の歴史的文化財に対する意識と直接ぶつかり合うことになりました。その経験をもとに、試行錯誤を繰り返しながら、歴史資料保存の活動を進めてきました。都市化した地域を中心とした市民の歴史意識のあり方を考え、その中から現代歴史学の課題を掘り下げ、多くの歴史関係者が共有できるものにしていくための第一歩となるような企画としていきたいと考えています。ご参加の程よろしく申し上げます。

日 時：11月23日(土) 午後2時から(時間は若干変更する場合があります)

場 所：立命館大学 衣笠学舎

\*時間・会場などの詳細は、史料ネットもしくは日本史研究会事務所のお聞きください。

第5回「歴史と文化を考える市民講座」

日 時 1996年8月25日(日) 13:00~17:30 (13:00開場)

会 場 大手前女子短期大学 Aホール(伊丹市稲野町2) TEL.0727-70-6334

JR宝塚線 猪名寺駅下車 西へ徒歩10分

阪急伊丹線 稲野駅下車 東へ徒歩5分

講演者 藤井 直正(大手前女子大学教授) <2人計1時間15分>

川口 宏海(ひろうみ)(大手前栄養文化学院助教授)

「発掘から見た伊丹郷町—近世から近代への発展—」

<コメント>

和島 恭仁雄(伊丹市立博物館館長) <20分>

「旧岡田家住宅の歴史—主として古文書からのアプローチ—」

今井 美紀(柿崎文庫事務局長) <30分>

「阪神間モダニズム文化成立、崩壊そして再生へ」

芝村 篤樹(桃山学院大学教授) <20分>

「近代大阪と衛星都市」

入場料 無料(但し、資料代として300円が必要)

「門戸の歴史を知ろう展」のお知らせ

日 時 1996年7月6日(土)~7月21日(日) 10:00~16:00

場 所 門戸厄神・東光寺(客殿広間) 西宮市門戸西町2-26 TEL.0798-51-0268

入場料 無料

主 催 門戸の歴史資料を守る会

共 催 門戸財産区管理委員会/東光寺

後 援 甲東文化財保存会/甲東公民館活動推進委員会/歴史資料ネットワーク

講演会 1996年7月7日(日) 14:00から (参加無料)

松田 俊教(東光寺副住職) 「門戸厄神・東光寺の改革」

坂本 一生(古資料収集家) 「被災資料を集めて」

大崎 正雄(元市立郷土資料館) 「門戸地域の歴史」

☆「歴史と文化をいかす街づくりシンポジウム」記録集2刊行のお知らせ ☆☆☆☆☆

さる1月28日に開催された第2回シンポジウムの報告集がこのほど刊行されました。報告・コメントのみならず、会場からの意見や感想なども掲載し、当日問題となった点を明かにするよう努めています。ご入用の方は、下記までハガキかファックスでご注文ください。記録集と振替用紙をお送りいたします。(記録集1も同様にご購入いただけます。)

定価 500円 (送料実費)

〒602 京都市上京区新町丸太町上る春帯町350 機関誌会館3階

日本史研究会 TEL.075-256-9211 FAX.075-256-9212

【第1部】シンポジウムの記録

(報告とコメント)

歴史的建造物の総合的な保全に向けて	足立 裕司	2
被災地域の埋蔵文化財と今後の課題	和田 晴吾	6
大震災と専門家の役割	坂本 勇	19
歴史資料の救済活動と地域づくり	藤田 明良	25
イタリアの都市復興と歴史遺産	内田 俊秀	36
(ディスカッション記録)		38
(シンポジウム出席者の感想から)		43

【第2部】資料編

被災地の歴史資料保存機関における		
救出史料の保管・整理状況調査の結果概要		48
阪神・淡路大震災関係論文目録		50
被災史料関係論文・紹介記事		54

☆☆「News Letter」郵送有料化のお知らせ☆☆☆☆

この第5号まで、被災地の歴史と文化をめぐる状況をできるだけ多くの方に知っていただき、あわせて史料ネットの活動に対するご理解を得るため、ボランティアの申し出をいただいた皆さんや、募金をいただいた方々に「News Letter」を広くお届けしてきました。しかしながら、歴史資料保全情報ネットワークから、持続的活動をめざす歴史資料ネットワークへと改組するにあたり、財政上の問題も考慮した結果、今後は「News Letter」の郵送については有料の申込み制とすることとさせていただきます。

1996年度中は、この第5号を含めて4号を発行する予定です。第6号以降を郵送ご希望の方は、郵送料500円を添えてお申し込みください。

<申込み方法>

郵便振替 口座番号01090-7-23009 名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会

◇募金口座と同じですので、通信欄にならず「「News Letter」郵送購読希望」とお書きください。

◆募金振込と同時に申し込まれる方は、振込額のうち500円を「News Letter」購読料とする旨を通信欄に明記してください。



史料ネット NEWS LETTER No. 5 1996. 6. 30 (日)  
 編集・発行 歴史資料ネットワーク  
 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内  
 TEL. 078-881-1212 (4070) FAX. 078-803-0486